

東京財団週末学校・研修生のみなさんへ

地元学ネットワーク主宰 吉本哲郎

調べるといふことは優れて開発である。みなさんには、調べ、考え、つくる、役立てることの楽しさ、おもしろさを知ってもらいたかった。人を巻き込み、道連れにし、仲間を増やして、新しいものをつくる楽しみを知ってもらいたかった。

役場に勤めるみなさんは、それぞれに違う仕事をしている。同じことはしていない。でもそこに、職場という仕事の地元学をやっていってもらいたい。みんなで生活現場を調べて、仕事に役立てていくことです。それは、決して小さいことではなく、全体の全があるということを知ってもらいたかった。

みなさんは、異動で職場が変わる。身につけねばならない制度や知識も膨大に求められる。異動のように変わるものがある。でも、変えてはいけないものもある。それはおそらく、人様の役に立つという志だろう。そこに、吉本地元学があります。

例えば、農林水産課や商工観光課、福祉や企画関係課でも、商業の地元学、農業や林業の地元学、観光の地元学をやって、自分の仕事を地域に生きる人たちの生活づくり、ものづくり、地域づくりに役立ててもらいたい。

自分で身につけた情報とノウハウをお互いに交換しあい、充実していってもらいたい。

そこに、地域から変わる日本があります。

みなさんと出会ったとき、みなさんが聞き書きに興味を持ってもらえるか心配でした。私の発表も短くて、時間がなくて、切られて、中途半端で不満でした。だけど、聞き書きをたくさんの人たちがやってきてくれて、とてもうれしく思います。

地元学は、地域を元気にするためにあります。でも、まず、人が元気になるようにしていきます。私の経験では、一代記などで聴いたおじいちゃん、おばあちゃんたちが元気になっていきました。みんなは話をしたかったのです。聴いてもらいたかったのです。でも、誰も、丹念には聴いてくれていなかったのでしょうか。聴くと、話をしながら涙ぐんでいた人もいました。兵庫の相生に一人で住む大道まさのさんです。島根県浜田市弥栄町の奥まった村に一人で生きる小松原悦子さん、役場から見捨てられ、自分たちでやってきた岩手県葛巻の垂柳地区で、村のみんなから母ちゃんと慕われ、がんばってきた外久保千代さんたちです。そして元気になっていきました。

誰かに話すことで自分を振り返り、私がすごいねえ、がんばったねえと思いながら聴いていたのが通じたのかもしれません。自分の人生を納得していったのかもしれません。

人は元気になると、何かを始めていきます。そこから、いろんなことが始まっていくようです。

皆さんも、これから、住んでいる人たちの話に耳を傾け、人の持っている力を引き出し、地域の持っている力を引き出して、地域を元気にしていく役場職員になってください。